

(2) 幕府外交との関わり

江戸幕府は、寛永12年(1635)にオランダと中国以外の諸外国との交易を制限する政策をとりましたが、実際は朝鮮国や琉球、北方アイヌとの交易も行われていました。

慶長12年(1607)に始まる朝鮮通信使の来聘は、幕府將軍職の襲職祝賀などで12回行われ、両国の友好関係が継続されることを願う文書などが取り交わされています。

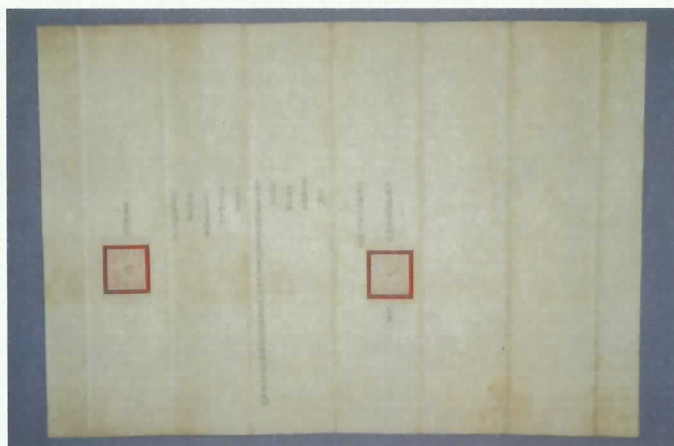
この来聘に際して、幕府の要職についていた久世氏も重要な役割を果たしています。

最初に関わるのは久世広之が小姓組番頭の役職の頃で、明暦元年(1655)の来聘の際、江戸城の警護と接待給仕を仰せつかります。

正徳元年(1711)の来聘では、第16代藩主久世重之(再封)が若年寄として、江戸城中での国書伝命の式典で御前護衛をしました。

次いで、享保4年(1719)の来聘では、重之も老中として国書伝命の式典に同席し、式を見守り、同年10月11日には「日本国源吉宗」の国書と別副を手渡す大役を務めました。この時、朝鮮上々官が久世家上屋敷に国書・別副の謝辞を述べに訪問しており、「礼曹書契」が渡されたと考えられます。

又、重之は前年に江戸を訪問した琉球使節団(吉宗將軍襲名への「慶賀使」)の応接にも重要な役割を担いました。



○書契

享保4年(1719)

8代將軍吉宗の襲職祝賀と両国の友好を願う内容が書かれている。

裏には「朝鮮国禮曹参判金演奉書 日本國執政源公閣下」とある。



○亀井家仕官録

久世家に仕えた関宿藩家老の亀井家主人が主家久世氏との関わりを記録したもの(寛永18年～明治14年)。

正徳元年(1711)と享保4年(1719)の朝鮮通信使に関連した記載がある。

また、琉球使節の対応や幕末の久世騒動に関する記録が克明に記述されている。